

# 中国トイレ事情の今

● 放 眼 日 中



いささか尾籠な話になるが、中国のトイレについては、いろいろな思いがある。特に、トイレへのこだわりが強い日本人はこの話題が意外と好きなのではないだろうか。最初に中国のトイレで用を足したのは30年前、上海の留学先宿舎。幼稚園のそれかと思うほど仕切りが低かったが、鍵はかかった。人民公園で腹を下し、仕方なく入ったトイレがいわゆる「ニーハオトイレ（仕切りもなく皆が1本の溝を跨いで用を足す）。一瞬ぎよっとしたが、体は正直に反応し、無事排出できた。しかも、管理人のおじさんが紙を売りに来てくれたことも有難かった。この体験により、中国で暮らしていく度胸があったと言えはあげさだろうか。

「これまで中国で一番すごいトイレはどんなところでしたか」。こんな質問を受けたことがある。忘れられないのは、黒竜江省満州里、ロシア（当時ソ連）国境のレストランのトイレ。トイレはどこかと聞くと、「外だ」と言われたが、外には湖があるだけ。何と、適当に穴を掘って用を足し、終わったら埋めておくという全くのアウトドア。もちろん、そんな環境では出るものも出なかったが、「中国ではなぜトイレのドアを開けて用を足すのか」といった疑問を何年も考えたこともある。ドアが開いているので人がいないと思つて入ろうとすると、ロダンの「考える人」のような姿勢で無表情に座る人とかくわして驚くこともしばしば。しかしこれもよく考えてみれば、前述の大自然トイレやニーハオトイレを使っている人にとっては、ちょうどわれわれの逆で「あんな狭い空間に閉

じ込められては出るものも出ない」ということではないだろうか。その中国のトイレ、最近はどうぞん改善され、公衆トイレが汚いなどといつても昔とは比べものにならず、使用に耐え得るものが増えていると思う。そして、日本を訪れる中国人観光客が一時こぞつて買い込んだのが日本製の便座だったのは、何ともおかしな現象だった。それは決してトイレへのこだわりからではなく、日本の技術を体感するちよつとしたお土産だったかとも思うのだが、便利なものはずぐに享受する現代中国では、一般家庭でも普及し一度それに慣れると、手放せなくなる。

先日、関西のあるJRの駅で中国人親子が困っていた。幼い息子は和式トイレで用を足すことができず、しかしこの駅には洋式がなかったのだ。「日本の公衆トイレに和式が多いのは驚きだ」と父親が真顔で訴える。中国の公衆トイレに洋式が多いとは思えないので、彼らは明らかに「科学技術先進国日本」という幻想を抱いている。と同時に、中国の大都市でも既にしゃがんで用を足すことができない子どもがいるという事実がこちら驚いてしまう。

そういえば、北京で地方から出稼ぎに来ていた人と話したとき「そろそろ生まれ故郷の農村に帰り、親の面倒を見たいが、北京生まれの息子は農家の『ぼつとんトイレ』で用を足せないの、実家近くの街のアパートに住むつもりだ」と言われたこともある。中国政府の掲げる「農村の都市化」は、実はトイレ事情から進む可能性すら感じてしまい、笑うしかなかった。



コラムニスト・アジアソウオッチャー  
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。